

表題：教育とは何か

What is the education?

著者：甲田純生

Koda Sumio

所属：保健医療学部救急救命学科

Faculty of Health Sciences

Department of Prehospital Emergency Medical Sciences

Key Word：教育、聖書、精神分析

education, Bible, psychoanalysis

連絡先：0823-70-4553、s-kouda@hiroko-u.ac.jp

## 教育とは何か

保健医療学部救急救命学科 甲田純生

要約：本論考は、「教育とは何か」という問題を考える手がかりを聖書とフロイトの精神分析に求める。聖書は教育のあるべき姿を、そして精神分析は教育のメカニズムを教えてくれるからである。旧約聖書の「天地創造の物語」は、神がこの世の主であることを告げている。これは、人間がこの世の主ではないことを意味する。教育においても同様である。教師は教育における主ではない。教育において、子どもは自らが内包する生命力によってこそ成長するのであり、教育とは「教え育てること」ではなく「教え、そして育つ」ことなのである。子どもが「育つ」というのは、子どもたちが高みへとのぼっていくことであるが、教師は子どもたちの「学びへの欲望」を起動することで、子どもたちに高みを目指すよう促す。「世の中には、君たちの知らない世界がある。私はそれを烈しく希求する」。教師がこのように振る舞うことで、教師が欲望するものを子どもも欲望する。それによって、それぞれの欲望のベクトルが同じ方向を向くことになる。これが、教育が成り立つメカニズムである。

### はじめに

子どもの育成に教育が重要な役割を果たすことは論を待たない。教育は言うまでもなく国家的事業である。人をどう育てるかは、そのまま、国の将来のあり方を左右するからである。したがって、教育がどうあるべきかについての青写真を描くのは、国家の仕事の一つであろう。

翻って、教育をめぐる昨今の状況を鑑みるに、国が教育現場に容喙する機会が増える一方で、大学入試改革における失態に如実に現れているように、理念なきままに教育が国家によって玩弄されているように見える。

周知のように、文部科学省は2020年度より大学センター試験を廃止し、新しい共通テストを導入することにしたが、その際、国語には記述式の問題を取り入れ、英語は民間の試験を活用しようとした。だが、導入決定の以前から識者たちが指摘していたように、そこにはいくつもの問題点があった。

10万人単位の受験生がいるテストに記述式を導入して、はたして採点で公平性を確保できるのか。受験生は共通テストで自己採点をして二次試験に臨むわけだが、その自己採点に客観性を担保できるのか。英語の民間試験活用に関しては、地域による格差を解消できるのか……等々。

文部科学省はこれらの問題を放置したまま見切り発車し、問題の解決を業者に丸投げしたため

に、教育現場は混乱を極め、ついには世論におされた形で記述式と英語の民間試験の導入が見合  
わされることとなった。日本の教育史上最大の失態と言える。

日本の教育界が混迷を極めているいま、必要なことは、原点に立ち返り、いまいちど「教育と  
は何か」と自問してみることでないだろうか。本論考では、この問題を考える際の手がかりを、  
聖書とフロイトの精神分析に求める。聖書は教育のあるべき姿を、そして精神分析は教育におい  
て働いているメカニズムを教えてくれるはずである。

## 1 天地創造の物語

旧約聖書が、神による天地創造の物語からはじまることはよく知られている。

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が  
水の面を動いていた。神は言われた。

「光あれ。」

こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と  
呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である<sup>(1)</sup>。

このように、神はロゴスでもって天地を創造したとされる。ユダヤ教やキリスト教を信仰する  
人であればともかく、そうでない人はこの天地創造の物語を、単なる作り話として一笑に付すか  
もしれない。しかしここには、すべての人間が耳を傾けるべき、強い戒めが秘められている。

神がこの世を創ったということは、神が創造主であり、この世にあるものはすべて神の「被造  
物」であるということである。もちろん人間もこの「被造物」に含まれる。

神はこの世の<sup>あるじ</sup>主である — 天地創造の物語はそう告げている。それは、裏を返せば、我々人  
間は、決してこの世の<sup>あるじ</sup>主ではない、ということの意味する<sup>(2)</sup>。

ところが現代の私たちは、まるで自分たちがこの世の主であるかのように思い上がり、振る舞  
ってはいないだろうか。例えば、東日本大震災のとき、津波で原子力発電がメルトダウンした際、  
政府高官も電力会社の人間も「想定外」という言葉を繰り返した。この言葉の裏には、自然現象  
は私たちの「想定内」に収まるはずだ、という傲慢さが透けて見える。

このような極端な例だけではない。聖書学者の田川健三は、天地創造の物語を解釈する中で、  
次のように述べている。

今時の人間は、農作物をどちらかという、人間が生産したもの、と思う方が強くなっているのではないのか。確かに、農業労働はきつい。また、近頃は、さまざまな資本の支配の結果、大量生産を目途として農業技術が発達してきた。そうするとますます、農産物は人間が作っている、という思いが強くなってくる。・・・植物の成長そのものは、そして、成長すると、あのような穀物やら野菜やら果実やらが出て来るという事柄そのものは、人間が生み出すことはできないのだ。そして、そうである以上、人間としては、自然の恵みをまず感謝していただく以外にありようがない<sup>(3)</sup>。

米や野菜を作るのは農家の人ではない。人間にそんな力はない。米や野菜は自らもっている生命力によって成長する。人間が行なっているのは、その成長を手助けする環境を整えているだけのことである。それなのに、私たちはしばしばこの真実を忘却し、「(人が)米や野菜を作る」と言う。そこには、人間が自然をコントロールしているのだという傲慢さが潜んでいる。それに対して、天地創造の物語が胚胎しているのは、自然の恵みに素直に感謝し、人間の傲岸さを諷めるといふ思想なのである。

## 2 イエスによる「神の国」の思想

この思想をイエスも受け継いでいる。新約聖書には次のような箇所がある。

神の国は次のようなものである。人が地に種をまき、夜昼寝たり起きたりしていると、種は芽を出し、成長する。まいた人が知らないままに、おのずと大地が実を結ぶのである。まず青草、ついで穂、ついで穂の中に実が満ちる。実が許せば、人がすぐに鎌を入れることになる。それが収穫というものだ<sup>(4)</sup>。

イエスの言う「神の国」がどんなものであるのかは、「まいた人が知らないままに」という言葉に込められている。「神の国」は死後に赴く天国などではない。種をまいた人が「知らぬ間に」、種が芽を出し成長する。神が与えた命、その命そのものが成長する力をもっている。この力が、なにものにも妨げられることなく発現する現世こそ「神の国」に他ならない。そして、なにゆえに植物がそのような力をもっているのかは、人智のあずかり知らぬことなのである。ましてや、自然の力は、人間によってコントロール仕切れるようなものではない。

### 3 教育の役割

人間はこの世の主などではない — この戒めこそ、旧約聖書における「天地創造の物語」から私たちに贈られた叡智である。この戒めは、教育においてもそのままあてはまる。

以前、優秀な卒業生を前にして、ある教員が「この子は私が育てたんです」と声高に言うのを目の当たりにしたことがある。それを聞いたとき、なんとも言えない違和感を覚えた。

教育者はもちろん、子どもに「教える」ことはできるし、それが仕事でもある。が、はたして教育者は子どもを「育てる」ことができるのであろうか。多くの教育者は — そして国も — この問いかけに対して「然り」と答えるのかもしれない。だがそれは大いなる誤謬ではあるまいか。人間に米や野菜を作る（＝育てる）ことができないのと同様、人間に人を「育てる」ことはできないのではないか。

一般には「教育」というのは「教え育てること」だと考えられている。だがそこに私たちは、米や野菜を「作る」と言うときと同じ傲慢さを看取することができる。植物が、自らの生命力をもって育つと同じように、子どもは自分の内に秘めた力によって育つのである。したがって、「教育」とは「教え育てること」ではなく、「教え、そして育つ」ことである。さらにいえば、「教え、そして育つのを見守る」ことである。

ところが、昨今の教育改革は、教育のこの本質を見失い、教育「制度」こそが子どもを「育てている」のだという盲信の上に行なわれているように思われる。制度こそが教育のあり方すべてを規定しているのだ、と思い込むからこそ、ひたすら制度をこねくり回すのであろう。だが、それによって教育現場を混乱させ、むしろ子どもたちの「育つ力」を阻害しているのではないだろうか。

一般化して言えば、教育が「教え育てることである」という誤解と盲信は、かえって子どもが育つのを邪魔するのである。人間はこの世の主ではない。それと同様に、教育者は教育における主ではないのである。

### 4 教えるということ

「教育」が「教え育てること」ではなく「教え、そして育つ」ことなのだとすれば、「教える」ことの重要性はむしろ際立ってくる。「教える」ことを通して教育者には一体何ができるのであろうか。あるいは、そもそも「教える」という行為において、何が起きているのであろうか。

「教育」をドイツ語では Erziehung（エアツィーウルク）という。この語は「引っ張る」を意味する「ziehen（ツィーエン）」という動詞からできた言葉であり、文字通りにとれば、子どもを

「引っ張り上げること」を意味する。教育学者の林竹二は次のように言っている。

学生たちだけでは到達できない高みにまで学生がのぼってゆくのを助ける仕事が授業なので  
す<sup>(5)</sup>。

林竹二は、「教える」という営みにおいて起こっていることを、正確に描写している。林は「学生がのぼってゆくのを助ける」と言っている。教育とは、子どもたちをある高みへと「引っ張り上げる」ことである。だが、それは決して、教師が力尽くで子どもたちを引っ張り上げることを意味しない。子どもたちはあくまでも、自分たちの力でその高みを目指してのぼっていくのであり、教師はそれを「助ける」のである。

では、教師はどのようにして、子どもが高みへのぼるのを助けるのであろうか。

## 5 「教えること」のメカニズム

哲学者の内田樹は次のように述べている。

教師の仕事は「学び」を起動させること、それだけです。「外部の知」に対する欲望を起動させること、それだけです。そして、そのためには教師自身が、「外部の知」に対する烈しい欲望に現に灼かれていることが必要である<sup>(6)</sup>。

ここには、子どもが高みへのぼるのを助けるメカニズムが、端的に語られている。それは、子どもの内部において、「学び」に対する欲望を起動させること、である。

「外部の知」というのは、「自分がまだ全く知らない未知の領域がこの世には存在する」ということを「知っている」ということである。子どもは、そのような領域が存在していること自体を知らない。知らないからこそ、それを知ろうとする欲望ももちえない。

教師の役割は、「いまのあなたたちには想像もつかないような知の世界、知の高みが存在するのですよ」と子どもたちに教えることで、そのような世界、高みを目指したいという欲望を子どもに喚起することである。それは、「教える」とは言ったものの、単なる知識の伝授とは異なり、いわば子どもたちに、知の高みを「垣間見させる」行為である。

それには二つのケースが考えられる。一つは、教える人間の存在そのものが、すでに高みにある場合である。例えば、教師がノーベル賞受賞者であるような場合である。世界最高の賞を受賞

するような叡智がどのようなものであるのかは、子どもたちには全く窺い知ることができない。それゆえ、その教師の存在そのものが、未知の世界を具現したものとなり、子どもたちの「学び」への欲望を起動する存在たり得る。

容易に気づかれるように、このようなケースは非常にまれである。もちろん、ノーベル賞だけが知の高みではないが、教員全員にそのような存在であることを求めることは、非現実的であろう。それゆえ、より現実的な方法は、内田氏が先に述べていたことである。すなわち、「教師自身が、『外部の知』に対する烈しい欲望に現に灼かれていること」である。

「私自身にもまだよくわからない、こんなすごい世界（領域）がある。私はその世界を求めてやまない。その世界がどんなものか知りたい。その世界を見てみたい。その世界を眺望できるような高みに立ってみたい。」教材の教育を通して、教師自身のこのような姿勢を子どもたちに伝播させることで、教師は子どもたちのうちに、「学び」に対する欲望を起動させることができる。そして、そのような欲望を起動させることができれば、子どもたちは自分も持っている力によって、その高みを目指してのぼっていくことができるのである。

## 6 教育における感情転移

これは、教師が烈しく欲望しているものを、子どもも欲望する、ということである。ここでは、教師の欲望のベクトルと子どもの欲望のベクトルが同じ方向を向くことになる。そのことによって、教師と子どもの中に、フロイトが「感情転移」と呼んだものが起こりうることになる。

フロイトは次のように述べている。

ヒステリーおよび強迫神経症の患者を相手に仕事をしていますと、われわれは間もなく全く思いもかけなかったような…事実につきあたります。つまりしばらくしますと、これらの患者がわれわれに対して全く特別な振舞をすることに気づかざるをえないのです。…すなわちわれわれは、苦しい葛藤からの逃げ道をひたすら求めているはずの患者が、自分の面倒をみってくれる医師という人物に対してある特殊な関心を寄せ始めることに気づくのです<sup>(7)</sup>。

「ある特殊な関心」というのは、もちろん好意を含んだ関心であり、場合によっては恋愛感情にまで至る。精神分析治療においてしばしばこのようなことが起こることから、フロイトは、治療者と患者の間で感情エネルギーが往来する、特別なメカニズムがあると考えたのである。それは簡単に言えば、病気の治癒を目指すという形で、治療者の欲望と患者の欲望が同じ方向を向くこ

とで、患者の感情エネルギーが治療者へと転移してしまうのである。

教育の現場においても同じようなことが起こる。子どものうちに「学び」に対する欲望を起動させることができた教師に対して、子どもが憧れの感情を抱くのである。それは、分析治療の場合と同様、場合によっては恋愛感情にまで発展する<sup>(8)</sup>。

## 7 教育における陥穽

「教えること」における以上のようなメカニズムを顧慮すれば、教育という営みには、その最も本質的な部分において、大きな落とし穴があることがわかる。

優れた教師というのは、子どものうちに「学びへの欲望」を起動させることのできる人間である。このことはこれまでの話から明らかである。ところが、「学びへの欲望」が起動すると、子どもから教師への感情転移も起こりうる。その感情転移は、教師に対する憧憬という形をとることもあれば、恋愛感情という形になることもあるだろう。

普段は優秀な教師であると誰もが認めるような人が生徒や学生に対してセクシャルハラスメントを起こしてしまった、という事例に遭遇すると、多くの人は「どうしてあの先生が？」と困惑するが、その困惑は、「学びへの欲望の起動 → 感情転移」という教育のメカニズムを知悉していないことにも一因がある。ハラスメントを起こしてしまった人間自身もこのメカニズムを認識していないことは言うまでもない。

教育の現場においてあってはならないこのような事例を防ぐためには、教育のメカニズムを教師自身がしっかりと理解しておくことが必要である。そうすれば、生徒や学生がときに教師に対して示す恋愛感情が、いわば疑似恋愛のようなものであることに気づくはずである。

## 結 論

私たちは教育を二つの面から考察した。まず聖書を通して教育をネガティブに<sup>(9)</sup>、次には精神分析によってポジティブにとらえた。

教師は教育における主ではない。教育において、子どもは自らが内包する生命力によってこそ成長する。それゆえ教育とは、「教え、そして育つ」ことである。

「教える」ことは、単に知識の伝達を意味しない。それは子どもたちが高みへとのぼっていくのを助ける行為である。教師はそれを、子どもたちの「学びへの欲望」を起動することで行なう。これが、教育が成り立つメカニズムである。



注

- (1) 『聖書』（新共同訳、日本聖書協会、2001）
- (2) 旧約聖書の創世記に関するこのような解釈は『キリスト教思想への招待』（田川健三、勁草書房、2004年）から学んだ。
- (3) 前掲書
- (4) 『現代新約注解全書 マルコ福音書 上巻』（田川健三、新教出版社、1997年）
- (5) 『教えるということ』（林竹二、国土社、1990年）
- (6) 『街場の教育論』（内田樹、ミシマ社、2008年）
- (7) 『フロイト著作集1 精神分析入門（正・続）』（懸田克躬、高橋義孝訳、人文書院、1971年）
- (8) 以上のことから、教育現場で教師が絶対にやってはならないことも明らかである。それは教師が生徒や学生を馬鹿にすることである。生徒や学生を馬鹿にする人間は、決して彼らの「学びへの欲望」を起動させることはできない。つまり、子どもたちを馬鹿にした時点で、教育はもう失敗しているのである。
- (9) ここではこの語は「否定的」ではなく「消極的」を意味する。それゆえもちろん、あとの「ポジティブ」は「積極的」を意味する。

